書庫収容の余裕年数について

前号掲載の「京都大学の書庫収容状況一覧」の余裕年数について，部局図書室のある同僚から疑問を出されたので，誤解がないように，前号の編集責任者として，紙面をかりてもう一度説明しておきたい。

その疑問というのは，10年以上の余裕年数をもっている部局が6つほどあるが，実際それだけ長くもつのだろうかというのであった。

この余裕年数の数字は—前号の記事をよく読んでもらえればわかることだが—，一応のメドをつける一途として，45年3月末現在の収容余裕冊数をかりに44年度増加冊数で除して出したものである。ところがその年間増加冊数というのは，注記しておいたように，今後平均3.4％の増加率でのびてゆくと推定されているので，実際の余裕年数の数値は当然これよりもっと小さくなるだろうと思われる。

更にこの算出の基礎になっている「大学図書館実態調査」の『収容可能数』の数字（これは各部局よりの報告によっている）自体が，これも注記しておいたように，文部省の「閉架書庫の必要面積」の基準からみると，全学的には，すでに49万冊余も超過してつめこんでいるということを示しているのであるから，もしも計算をこの基準にしたがって，やり直してみるということになれば，余裕年数はもっと大幅にダウンするのは自明の理である。

誤解をさけるために，はじめ，「図書室はうったえる—現状報告」欄に，「年間増加冊数の激増のために，20年はもたない—医学図書館」という原稿も用意していたが，これはスペースの都合上掲載できなかった。

前号の“書庫収容状況”特集の意図したところは，比較的ゆとりのある少数部局の書庫があと20年もつか18年もつかというようなことを問題にしようとしたのではなく，全学的にみての苦しい書庫収容の現状をうったえ，20年後には現在の300万の蔵書が2倍近くになる—それにたいする書庫スペースがどこに見出されるだろう？—という先行きも考えての打開策を，緊急にうちたてられるようもとめたものである。

（附属図書館　小国健一）

——資料紹介

須田文庫目録の完成

静修（Vol. 5 No. 3）でお知らせしましたが，故須田国太郎氏の愛蔵書が文学部に寄贈され，「須田文庫」として保存されることになり，この程その整理が終り，Ⅰ和書篇，Ⅱ洋書篇（冊子目録）が完成しました。「須田文庫」は，西洋・東洋・日本にわたる美術書を中心に学問の各分野の図書を加えて，約4000冊の蔵書である。「文庫」は文学部図書室哲学科書庫に収蔵されている。

——ニュース

京都大学蔵書300万冊を突破

本号（6P）でお知らせしているように，昭和46年3月末で300万冊へあと1200冊となっていたが，5月18日に300万冊を突破した。京都大学では，明治30年7月23日に第1冊を受入れしてから74年間を要したことになる。現在，1年間に約10万冊づつ増加していることを思うと，更に300万冊増加するのに30年を要しないであろう。それ程，昔に較べて増加冊数は著しい。その理由としては大学の規模が大きくなったこと，研究費の増額など，いろいろの条件が考えられよう。しかし，莫大な量の図書を管理する図書館員も大へんなことであるが，これらの図書がいかに活用されているかも問題とすべきである。蔵書の中には学術的に無価値となったものがあるとしても，研究と教育のため，多くの人人に開放され利用されることを望みたい。